

## ビワを加害する新種の害虫

### ビワキジラミ

2012年に徳島県の栽培ビワで国内未記録のキジラミ類が多発生し、ビワの花芽や果実、新梢の表面にすす病の被害が発生しました。(独)農研機構果樹研究所では、このキジラミ類が新種であることを確認し、本種の生態、形態および被害の特徴について概要を明らかにしましたので紹介します。

#### ☆ 技術の概要

1. 本種の幼虫は、ビワの花芽基部や果梗部、芽鱗の下などに単独または数匹の集団で寄生し、甘露や白色ろう物質(ワックス)を多量に排出します(図1C, 図2B)。これらの排泄物が付着した果実や葉、花芽の表面にはすす病が発生します(図1A, B)。
2. 本種は、春から初夏にかけて多発生したあと、盛夏季にはビワ樹上にほとんど見られなくなりますが、秋以降にビワの花芽に産卵し、翌春まで花芽や幼果の上で数世代を繰り返します。そのため、花芽や幼果への産卵が済んだ春季以降に果実を袋がけするだけでは、本種による果実の被害を防ぐことはできません。
3. 本種の成虫は、前翅外縁の褐色斑紋などの特徴によって、日本に分布する他の同属種から区別できます(図2A)。世界でビワ属植物に寄生するキジラミ類は台湾から2種が知られていますが、本種はいずれの既知種にも該当しないため、*Cacopsylla biwa*の学名を与えました。
4. 2014年7月現在、本種は徳島県のみで発生が認められています。



図1 ビワキジラミによるビワの被害. A, 有袋果に群生する成虫と幼虫. B, 無袋果のすす病害. C, 花芽基部に寄生する幼虫(白いのは甘露とワックス).

図2 ビワキジラミ成虫(A)と芽鱗の下の幼虫(B).

#### ☆ 活用面での留意点

1. 本種がビワ以外の作物を加害する可能性は低いと考えられますが、さらなる調査が必要です。
2. ビワを含む多くのビワ属植物の原産地である中国長江流域では栽培ビワを加害するキジラミ類(学名未決定)の発生が知られており、これは本種である可能性が高いと思われます。
3. 本種の防除に当たっては、合成ピレスロイド系トラロメトリン水和剤とネオニコチノイド系ジノテフラン水溶剤が使用可能ですが、花芽基部などの隙間に隠れている幼虫には薬剤がかかりにくいいため、薬剤散布にあたっては注意が必要です。
4. 詳細は、農研機構果樹研究所カンキツ研究口之津(0957-86-2306)にお問い合わせ下さい。

(果樹研究所カンキツ研究領域・主任研究員 井上広光)